

■会議結果報告書■

会 議 名 称	令和3年度第9回札幌市子ども・子育て会議児童福祉部会
日 時 ・ 会 場	令和4年3月2日(水)18:30~21:00 子ども未来局大会議室(WE B会議)
出 席 委 員 8名／9名中	松本 伊智朗(部会長)、稲生 義裕、伊林 潤、大場 信一、北川 聡子、高橋 司、 藤原 理佐、箭原 恭子(敬称略)
傍 聴 者 数	3名

議 事	概要等
1 議題1 子どもの生活実態調査の調査結果中間報告について	<審議概要> 事務局より、下記資料の説明を行った。 ・資料1 実態調査の概要 ・資料2 市民アンケート中間報告概要 ・資料3 市民アンケート中間報告 ・資料4 支援者ヒアリング意見まとめ <主な委員質問・意見> ○部会長 補足だが、所得に関して、収入についての設問は、前回調査は実額を記載する方法、今回は選択肢による方法であり、この部分の回答率は今回の方がかなり上がっている。前回で、欠損率(無回答)が25%、26%ぐらい。今回は10%ちょっとなので、選択肢の方が書きやすかった。回答率そのものもかなり上がっており、前は中学校の回答率がちょっと低かったが、それも同じように上がっているので、恐らく前回のデータより今回のデータの方がきちんと全体をよく反映しているだろうと考えられる。 ○委員 資料1の15ページの成果指標関係について、全体的には数値が改善してきているが、困っている親子が増えている実感がある。札幌市としてはどのようにこの数字を捉えているのか教えてほしい。 また、支援者ヒアリングの中で、保護者自身の精神疾患、知的障害、発達障害というのがあるが、相談を受ける中で、母親自身に軽うつなどの症状があり、背景に、夫からのコントロールがあつて、子どもの口をふさぎそうになることがあり、ショートステイなどを勧められても、夫が絶対そういうところに預けるなと言って預けられないという相談が3件ほどあった。支援者ヒアリングの意見の概要にはないが、DVについて調査結果の中ではどのようになっているのか教えてほしい。 ○事務局 成果指標の部分については、資料のとおり、改善傾向ということが数値の上からは言える。実際の感覚としてどうなのかということもあるので、要因分析をもう少し細かくしなければならないと考えており、例えば、家計の状況については、コロナによってどの程度影響があったという別の設問も設けているため、そこと併せて見ていくことなどが必要と考えている。 2点目のDVの関係について、支援者ヒアリングの意見の概要には載せていないが、DVについての意見も、意見の詳細では聞かれている。今後そういったところも

	丁寧にすくい取って考えていきたい。 ○委員 資料2の6ページ、子どもが回答した就学に対する希望のところで、進学先が札幌市内か市外かということによっても違ってくると感じている。子どもたちの希望が、積極的な希望として示しているのか、消極的な希望として示しているのかということも非常に大切と思う。親の意向や子ども自身が家庭の経済状況を見て進路を判断している場合もある。積極的な進学希望と消極的な進学希望では、進学後の、中退率も高くなると思うので、こういう要素もあるということを調査結果の分析の中で指摘、あるいは見解を示した方がよいと感じた。 特に、高等教育を受けるということが貧困の連鎖を防ぐとも言われているので、進学希望が、どういう子どもたちがそういう希望を持ったのかということがある程度分析できれば、より貧困対策に結びつくと感じている。 児童養護施設から卒園をして高校進学になる子どもが、やはり親の意向にかなり振り回されている、又は、家庭の経済状況を判断して、希望と違う進路をとる場合が多くあるので、貧困対策を考えるときに、その辺も踏み込んで分析していただきたい。 ○事務局 調査項目の中で、希望する進学段階を聞いた後に、その理由を選択肢から選んでもらっているが、希望する学校や職業があるからという、積極的な理由から、親がそう言っているから、家にお金がないと思うから等、11の選択肢から選んでいただくような形をとっているので、この点と併せて細かく見ていくことが今後必要と考えている。
2 議題2 ヤングケアラーに関する実態調査の調査結果報告について	<審議概要> 事務局より、下記資料の説明を行った。 ・ヤングケアラーに関する実態調査結果について（概要版） ・札幌市ヤングケアラーに関する実態調査業務報告書 <主な委員質問・意見> ○部会長 今日は報告をいただくということで、例えばヤングケアラーのことについてどういう支援策があるかというのは、また改めてこの部会で話すような機会があるという前提でよいか。 ○事務局 予算、研修、ピアサポート、市民への啓発というのを考えているが、まだ検討の段階のため、少々お待ちいただきたい。 ○委員 各学校からの調査報告について、各学校のどういうポジションの方が回答しているか。 ○事務局 教頭先生が1番多く回答しており、2番目が主幹・主任教諭の先生。 ○部会長

国や道の調査と重ねても、大体、三、四%ぐらいのところで、回収率だとか調査方法が違っても大体この辺に落ち着く。それぐらいの頻度でいるのだろうなというのが見えてきた。

「お世話をしている現状を知っている人」という調査項目は、国の調査にはなくて、道と札幌市の調査の方に入れたもの。誰が知っているかということを知るとするのは、介入なり支援のためのルートで、大変重要な質問。「知っている人はいないと思う」という子が4割ぐらいで、学校の先生というのは結構少ない。子どもの方から見ると、余り周りの人は知らない、この人なら知っているという人はいないということ。学校から見ると、支援が必要と思われる子どもには特徴があるというよりも、特徴がある子どもを把握しているのだろう。ここのずれをどう考えるかというのは、この支援枠組みを考えるときにとても大きい。

また、世話をしている現状を知っている人は、ケアマネとかお医者さんとかというのは低い。支援現場の方に、子どももケアしているということが分かっていないということがあり得るということ。地域包括であるとか、精神科のソーシャルワーカーさん、そういうことをしている人、そこと学校がどうつながるかということが大事。

○委員

家族の方の困り感を聞く中で家庭の状況が分かるということはある。ただ、家族は難しい共同体で、それが当たり前になっているところにどうやって風穴をあけるかというのは非常に専門性が要るところでもある。ソーシャルワーカーとか、専門家による検討会やワーキングから施策を導く必要がある。

○委員

ヤングケアラーと子どもの貧困は重なっているので、子どもの貧困というところからもヤングケアラーに対してのアプローチができるのではないと思う。支援調査対象について、小学生へのアプローチも考えてはどうか。

○事務局

国で小学生と大学生を対象にしたヤングケアラーの調査をしているので、その結果もにらみながら考えていきたい。

○委員

概要版の15ページについて、支援が必要と思われる子どもの状況というのは、ヤングケアラーということを特定せずに、支援が必要な子どもがどんな状況なのかを聞いているので、タイトルが、乖離しているように見える。

○事務局

誤解のないように、修正を検討する。

○部会長

概要の方で、クロス集計の縦横の軸がそのときによって変わるのでですね。編集しやすいからだと思うが、概要版だけ見ると大変混乱をするので、分かるようにしておいた方がよい。

○委員

相談しても何も変わらないなら相談しない方がいいというようなことになる場合と、相談しても、お母さんのことだから頼むねと言われると、その状況を補強してし

	まうということもある。 また、ヤングケアラーをいろいろな家庭での支援プランの中に当てにしているプランが結構見られた。そうすると、子どもたちがそこから抜け出したいと思っいてても、それをさせないような現状もある。相談したときに、その後、解決につながったのか、改善につながったのか、その分析にも触れていただくとよい ○部会長 かなり活発な意見が出たので、もう一度、この場でいろいろ意見交換をするような機会を持っていただくというのも、ぜひ積極的に考えていただきたい。 子どもの支援だけでなく、家族の支援をどうするかと、大人の支援、あるいは障がいを持つ子どもなりの支援をしているところが、子どものことに対して配慮なりが広げられるというふうな、両方のことをにらんでいろいろな施策を立てる必要がある。
3 議題3 令和4年度 児童福祉施設等の整備 計画について	<審議概要> 事務局より、下記資料の説明を行った。 ・柏葉荘 地域小規模児童養護施設（仮称）しのろ ・興正学園 地域小規模児童養護施設 興正チャイルドホーム平岸 <主な委員質問・意見> ○委員 2つの児童養護施設とも、本体施設の定員はそのままプラスするというこでよいか。 ○事務局 その予定である。
4 議題4 児童虐待事 案の検証に ついて	非公開
5 その他	（議事概要について、発言者に内容確認済み）